第６回シンポジウムの成果をまとめ両町に提出された「18の提言」

＜土台となっている自然＞×＜仕事＞　３年後

○島人が全員年に１本、自生の木を大山／越山に植林している。山の先生も復活し、小中学校の学林地もかつてのように緑が復活し、海の海草にも変化が現れ始めた。

○赤土の流失を防ぐための、緑地保全ルール（赤土等流出防止対策協議会）が徹底運用され、作物収穫後の裸地にも緑肥が必ず植えられ、赤土の流失を防いでいる。

○島大学（後述）で森の案内人を育て、大山／越山の散策路を使った自然勉強会･観察会が定期的に開催され、エコツーリズムも盛んになっている。

○字毎に、自慢できる湧水場の整備が完了しており、湧水場には太陽熱温水器の設置が始まり、交流の場になっている。太陽光を主なエネルギー源とした自足型エネルギーシステム（電池）の『たまり Ba(r)』（後述）への導入検討が具体的に始まっている。また、集落の屋根を利用する太陽光発電所の具体的な導入計画が進んでいる。

○地下水の水質調査結果が毎月公開され、地下水汚染に対する方向付けが決定している。

○営業生ゴミの分別回収が始まり、有機肥料への利用方法が具体化している。

○島月桃などの高ポリフェノール植物の薬草化が検討されている。

＜コミュニティーを煽る食、楽しみ･遊び･学び、集い＞×＜仕事＞　３年後

○生産者を大事に！を掲げた、自給自足の島ネットワーク会社が設立、運用を開始している。農家や個人の過剰野菜や果物の集配がはじまり、余った食材は漬物やお菓子に加工する加工所の設置が始まっている。

○小学校区毎の１集落で米作りがはじまり、全小学校での米作りの方向付けが完了している。

○里芋、ニンニクなど、品種を絞り、無農薬栽培への挑戦が始まっている。アロマ用の無農薬花卉の栽培実験も始まっている。また、減農薬に関する議論が両町で開始している。

○伝統的な島料理（お菓子を含む）や島食材に加え、ヤギのチーズやハーブ等を使った有名シェフモダン健康料理のレシピ本が出版されている。ヤギ牧場では動物との交流とモダンヤギチーズ作りを開始している。

○年に一回の食の文化祭では、子供創作料理、我が家の自慢料理、プロの創作料理大会が開催され、島人と観光客で賑わっている。

○廃校を利用し、技能者の認定を受けた島のお爺やお婆が島人に技を教える島大学が設立されている。そのための認定システムが制定され、一部の教育システムが動き始めている。単位取得者は准技能者認定の資格も得られる。農業高校の設置も議論が始まっている。また、廃校を事務局とした通信制大学 (ex: 星槎大学分校) 開講のための議論が始まり、芸術学科の設立も検討されている。

○魚／農／芸を中心にした島暮らし体験（民泊、古民家ステイ）ビジネスがはじまっている。島に到着してから離れるまで､自給自足を基本として､自然に生かされていることを知り､生き方を考える２泊３日からの色々なコ-スの中で島外の個人やグループ、企業研修が行われている。ここでは、必要に応じて島の伝統芸能の体験や、自然を基盤とした最先端の環境教育や企業戦略などの講義や実習のカリキュラムも選択できる。

○島大学で方言教授の指導を受けた講師が、子供たちに方言を教えている。子供たちは、お爺やお婆と方言で会話をするのが夢で、方言ミュージカルも開催する。アシミジ節の授業や講習が小中学校（特色ある教育）や字で行われ、いつでもどこでも歌い踊れるようになっている。その結果、祭りは活性化し、壮年もお爺やお婆も子供たちとのつながりが強くなっている。

○両町商工会のポイントカードが共通となり、銀座通りでは『もの』から『心』売りへの挑戦が始まっている。通りには人の溜まり場があり、若い人たちは新しい商売を期間限定の空き店舗を利用して次々に展開しており、地域通貨に関する議論もはじまっている。

○各字（あるいは校区）ごとに空き家や集会所を利用した「たまりBa(r)」が1、2個ある。そこでは、すべての他の「たまりBa(r)」情報（イベント／冠婚葬祭／食材）が得られる。Barの運営費は、キビや野菜の販売、営業時間22時までのコインBar（大人たちは毎夜のように通って色々と面白いアイデアをワイワイガヤガヤ考えている）の売り上げで賄っている。

『えらぶ』してる？　が、ご挨拶。